

都道府県・指定都市番号	43	都道府県・指定都市名	熊本県	研究課題番号・校種名	1 高等学校
				教科名	家庭（共通教科）
研究課題	学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究 ○自立した生活者として、生涯を見通して生活上の課題を解決する能力を育成するための主体的・協働的な学習指導及び評価方法の研究				
学校名（生徒数）	熊本県立第二高等学校（1226人） <small>くまもとけんりつだいにこうとうがっこう</small>				
所在地（電話番号）	熊本県熊本市東区東町3丁目13番1号（096-368-4125）				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	<a href="http://sh.higo.ed.jp/daini/">http://sh.higo.ed.jp/daini/</a>				
研究のキーワード	ICEモデル ルーブリック 自立度を自己評価するチェック項目 リフレクションシート 「思考」を意識した実習計画表				
研究結果のポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ KP法（紙芝居プレゼンテーション法）を導入したプレゼンテーションは、生徒が短時間で説明をする際に内容を構造化しやすいため生徒にとって取り組みやすいと好評であった。</li> <li>○ ブレインライティングは、他教科の教員からも便利さが認識され、教科を越えて活用された。</li> <li>○ チェックリスト形式を採用したリフレクションシートは、評価表がわかりやすくなった。</li> <li>○ ホームプロジェクトのルーブリック評価表の改善により、生徒自身がより上位のレベルの取組をメタ認知する機会となった。</li> <li>○ 「形成的評価」の役割を担う「自立度チェック」を複数回実施することで、生徒の知識・技術の定着に効果が認められた。</li> <li>○ 五感を意識した体験を積み重ねることで、生徒の感性が磨かれた。</li> <li>○ 生徒自身の振り返りの回読によるシェア活動は非常に有効であった。</li> <li>○ 教職員研修で、ID（インストラクショナルデザイン）の考え方を導入した「授業改善のための工夫の見せどころシート」の形式を紹介することで、本研究の取組を共有できた。</li> <li>○ 家庭部会の地区研究会でKP法の事例を紹介したところ、授業以外にも学年集会で活用できたとの声が聞かれた。活用しやすい方法を共有できたことは非常に有意義だった。</li> <li>○ ARCSモデル（授業や教材を魅力あるものにするためのアイデアを整理する枠組み）を体験した家庭科教員が県下に複数いることで、今後学校を越えた授業改善のツールとして活用が期待できる。</li> </ul>				

1 研究主題等

(1) 研究主題

「家庭基礎」における、深い学びをもたらす指導方法等の研究  
 ～五感を意識した科学的な理解と学習の質の向上～

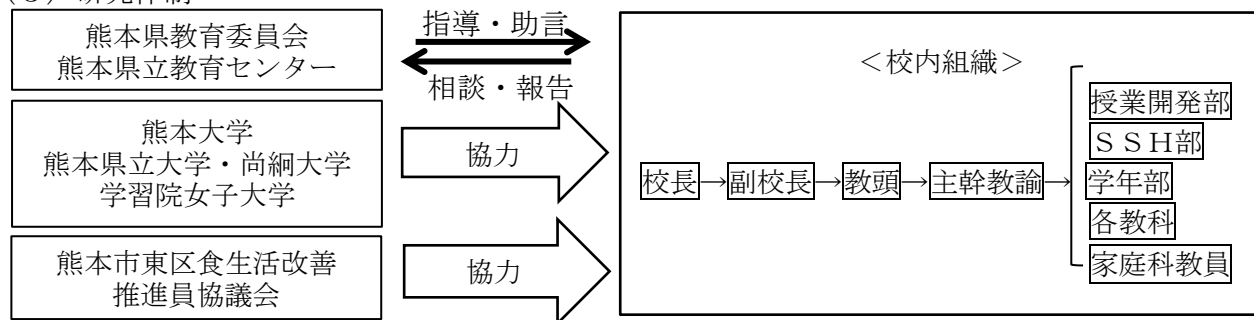
(2) 研究主題設定の理由

本校の理数科では、学校設定科目「科学家庭」（SSHの取組として実施）において、生徒のプレゼンテーション能力の向上を目的としたポスターセッションを実施してきた。一昨年度は、この取組に加え、ポスターツアー等の工夫をした結果、生徒一人一人の主体的な参加が顕著になり、生徒による授業評価において高評価を得ることができた。しかし、一方では、生徒の主体的・協働的な学びを的確に評価するという点において課題がみられた。

そこで、普通科及び美術科が履修する「家庭基礎」においても、これらの主体的・協働的な学びにつながる手法を積極的に導入することにより、本校の生徒が主体的に学び、協働的な活動を通して、深い学びへと導く指導方法や評価方法を研究したいと考えている。

これらのことから、生徒の「深い学び」へとつながる指導方法の工夫・改善を積み重ね、評価の方法を検証することにより、生徒の学習意欲の向上につながることを期待し上記の研究主題を設定した。

(3) 研究体制



(4) 2年間の主な取組

平成28年度	4月 年間指導計画, シラバス, 評価規準等の作成 5月 自立度チェックの項目作成と実施 (授業開始時, 各学期末考査, 計4回) 6月 実習前後のマークシートを活用した自己評価 「深い学び」につながる考査問題の工夫及び実施 (各学期末考査計3回) 7月 ホームプロジェクトの実施 (7月, 2月) 8月 岐阜県立大垣桜高等学校, 岐阜県立城北高等学校, 三重県立相可高等学校への学校視察 9月 ポスターツアー実施の工夫 (9月, 12月) 11月 ICEモデル理解のための広島県立祇園北高等学校への先進校訪問と校内職員研修 教育課程研究指定事業研究授業実施 (担当教育課程調査官指導訪問) 12月 思考を意識した調理実習計画表の工夫 1月 中間報告等の資料作成に向けた担当指導主事との打ち合わせ 2月 研究の成果の検証と次年度への改善策の検討, 学校ホームページへの情報掲載 国立教育政策研究所研究協議会において中間報告
平成29年度	4月 職員への研究内容共有, 年間指導計画, シラバス, 評価規準等の作成, 自立度チェックの実施 (授業開始時, 各学期末考査, 計4回) 5月 職員研修の企画・検討 (6月, 8月, 10月) 6月 「深い学び」につながる考査問題の工夫及び実施 (各学期末考査計3回) 7月 ホームプロジェクトの実施 (7・8月, 12月), 熊本県立大学との連携 8月 岩手県立大学・青森県立八戸高等学校への学校視察 9月 ポスターツアー実施の工夫 (9月, 2月), 授業改善のための見せどころシート検討 10月 ICEモデル及びID理解のための職員研修, 熊本大学鈴木克明教授質問会 11月 教育課程研究指定校事業研究授業実施 (担当教育課程調査官指導訪問) 12月 ホームプロジェクトのシングルポイントループリックでの検討 1月 報告等の資料作成に向けた担当指導主事との打ち合わせ 2月 研究成果の検証と次年度への改善策の検討, 学校ホームページへの情報掲載 国立教育政策研究所研究協議会において報告

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

①指導手法と評価方法の改善

- ア K P法とブレインライティングの活用
- イ 「ICEモデル」を用いた「深い学び」につながる考査問題等の検討
- ウ リフレクションシートの活用: 履修主義と習得主義, ヒドゥンカリキュラム
- エ ホームプロジェクトでのループリック評価表の活用: シングルポイントループリック
- オ 実習の工夫・改善
- カ 五感を意識した科学的な理解: グラフィックシラバス

②公開授業・研究協議の実施: 昨年度実施内容を改善して保育領域でポスターツアーを実施

③校内での普及活動: 授業開発部・SSH部での活動, 職員研修の企画・運営

④県内家庭部会での普及活動: 家庭部会, 地区研究会

(2) 具体的な研究活動

①指導手法と評価方法の改善

ア K P法とブレインライティングの活用

思考ツールとしてK P法を活用した。ジグソー法を活用した学習では, グループの他の生徒への説明をする場面があるが, その際に名刺サイズの用紙にキーワードを書き, それを使って説明する方法を取り入れた。

また, 単元のまとめやホームプロジェクトのアイデア共有の場面でブレインライティングを活用した。沈黙の発想会議法といわれるこの方法を活用することで, アイデア出しのコツがつかめる上にアイデアの共有を図ることができ, 振り返りの記述においても, テーマの選定においても大いに活躍した。

イ 「ICEモデル」を用いた「深い学び」につながる考査問題等の検討

昨年から継続して「Eレベル」(I: Ideas・知識, C: Connections・つながり, E: Extensions・発展)に相当する問題を作成し, 各学期末考査で出題した。また, この視点の出題は大学入試改革の方向性とも合致していることから, 職員研修でも提案し, 教科を越えた作問を実施した。

ウ リフレクションシートの活用

チャイルドビジョンなどの体験や調理実習後の実習記録を書く場合, リフレクションシート(リフレクションするためのループリック評価表)を配付し, 評価の観点を生徒が手に入

れて、自らの学びを深める一助とさせている。昨年までのシートは、評価に段階がある評価表であったが、このことが「このくらいでもよいのだ」という無言のメッセージになってしまふという側面を知り、今年度はチェックリスト形式(チェックリストもルーブリックの一形式)とした。評価の観点を並べ、それができていれば合格、できていなければ「なぜ不合格なのか」がわかる記述語を載せて理解が深まるように配慮した。

エ ホームプロジェクトでのルーブリック評価表の活用：シングルポイントルーブリック

ホームプロジェクト実施のプロセスを手順に沿って説明する。概要説明時に生徒が自己評価のルーブリック評価表(ガイド的に活用)を手にする → ブレインライティングを活用したテーマ検討 → 家庭での実践(評価表で確認しながら進める) → 提出後、グループでの資料回覧と口頭発表、相互評価 → 再度自己評価 という段取りで進めた。そのプロセスを経験した時点で、準備されたルーブリック評価表の「期待している」(最高レベル)を満たしている生徒も多く、これがルーブリックの限界といわれる点であった。そこで、一層上位のレベルが測定できるルーブリック評価表へと改善する取組として、シングルポイントルーブリックを活用した。今回使用したものは、最初に生徒へ配付した「期待している」レベルの記述語を中央に再配置し、その両側を空欄にしたものである。その左側の空欄に当てはまる記述語を考えるとという取組を実施することで、一層高い目標を具体的に認識することにつながった。生徒各自が「自分のルーブリック評価表」を作成し、それを使って2回目のホームプロジェクトに取り組んだ。

オ 実習の工夫・改善

熊本県立大学環境共生学部居住環境学科及び総合管理学部の学生共同プロジェクト「ジェーンズ邸復興プロジェクト」と連携した取組を実施した。本校内でも、「総合的な学習の時間」と連携を図り、大学生のプロジェクトに関する講演会の実施を受けて、「家庭基礎」では住生活領域の学習素材として「ジェーンズ邸パーパークラフト」作成に大学生の指導を受けながら取り組んだ。作成後は、大学生の活動を参考に、「今の自分たちができる社会貢献活動」についてブレインライティングを実施し、生徒が思考を深めた。

大学との連携では、尚綱大学との味わい調査を継続した。また、学習院女子大学の品川明教授を招聘し「五感を科学するプロジェクト」を企画し、味わい講座を実施した。

また、校内では英語科と連携し、バングラデシュをルーツとするALTとともにバングラデシュ料理の調理実習に取り組んだ。異文化理解の一面も意識し、食材や英語のレシピにも触れ、希望者は手指食も体験した。

今年度10月中旬に熊本地震により使用できなかった調理実習室が復旧したが、生徒の技術力の定着のためには家庭での実践の機会を作っていくことの必要性を感じたことから、昨年度実施した反転学習形式の調理手順学習を行い、調理手順を思考する「実習計画表」を作成した。今年はその実習計画表を使って家庭で実習した内容について二高eラーニングを活用し、ブログ形式で投稿する取組を行った。

自立度チェックは、昨年同様に授業開始時と各学期末考査の合計4回実施した。同じものに複数回取り組むことで、形成的評価としての効果が発揮され、知識・技能の定着へとつながっている様子が見えてきた。

カ 五感を意識した科学的な理解：グラフィックシラバスの導入、活用

五感を意識した体験、言い換えれば「非言語認知を言語化する体験」を視覚的に認知できる「グラフィックシラバス形式」にし、それぞれのつながりが意識できるようにした。

②公開授業・研究協議の実施：昨年度実施内容を改善して保育領域でポスターツアーを実施

昨年度の反省点を改善するため、発表スタイルをKP法での発表形式とし、B4用紙のKPをめくりながら説明する方法とし、市販のボードにクリップで挟む形式で見やすくした。

③教職員研修

今年度は、教職員研修のあり方を変えようという校内の共通認識のもと、「受ければ終わり」というこれまでのあり方を脱却し、事前課題を経て対面での研修、そして事後課題というサンドイッチ形式で職員が学び続けていくスタイルとした。まずは、昨年度の研究指定校事業の研究内容を教職員間で共有するところから始めた。その方法として、2月の研究発表のスライドをもとに発表原稿の音声付きの動画を作成し、その動画を視聴するという事前課題を出した。それを踏まえ、ICEモデルを活用した考査問題作成やシラバス検討などグループ別の職員ワークを対面研修で実施し、事後課題にはアンケートを実施した。次のステップとして、8月のICT活用研修はIDを使った効果的な進め方について実施し、10月には「授業改善のための工夫見せどころシート」の検討と職員全体での作成に取り組んだ。

④県内家庭部会での普及

熊本県の家庭部会では、県内を10地区に分けての地区研究活動を行っている。地区研究会では、KP法によるプレゼンテーションを会員自身が体験し、夏の研究発表大会で一部活用したプレゼンテーションを行った。また、来年度本県で開催される「九州地区家庭科教育研究協議会」では、研究協議にIDの一つのツールであるARCSモデルを取り上げることになっており、本研究を通して、企画・運営に協力することができた。

### 3 研究の成果と課題 (○成果●課題)

- KP法は、説明内容を組み立て(構造化)やすく、発表しやすいと生徒に好評である。ジグソー法を活用したグループ内説明の際に名刺サイズのミニKPを使うことを第一段階としているので、生徒にとっては段階を追って難しい課題に取り組むことができ、順序になっており、ポスターツアーでB4サイズの用紙にグループで協力して説明を考えることにも容易に取り組むことができている。
- ブレインライティングは他教科教員からも便利さが認識され、2年生の「総合的な学習の時間」におけるテーマ研究においても活用されている。
- ICEモデルを活用した「Eレベル」の作問で目指しているのは、しっかりと思考した解答が期待できる考查問題であるが、50分の考查時間で十分思考する時間の確保ができるのか難しい面もある。制限された時間の中で解答するというこれまでの手法では、これまでの瞬発力や機械的応答力のみを測定してしまうことにつながってしまうので、これを考慮し真の「Eレベル」の出題をするならば、考查の前に問題(深い思考を要する問題)を生徒に提示し、生徒自身が「本当の意味での学習」を深めて考查に臨み、十分思考を巡らせた内容を解答する記述試験を準備しなければならないのではないかと考えている。
- チェックリスト形式を採用したりフレクシオンシートに改良したことで、生徒にとってわかりやすい評価表とすることができた。
- ホームプロジェクトのルーブリック評価表の改善で、シングルポイントルーブリックを使用してみた。このことで、生徒自身ももっと上位のレベルの取り組みをメタ認知する思考機会とすることができた。生徒たちは非常に柔軟なアイデアを産むことができ、さらに実践を深めていきたいと意欲をみせている。
- 実習の工夫において家庭での実践を二高eラーニングにブログとして投稿する課題としたが、家庭で実践し実習記録を提出するのみだった昨年と比較すると、投稿率は低くなったものの、内容は非常に高度なものになった。大きなハードルを越えることで、一人一人の技術の定着に向けて大きな効果が期待できる。ハードルが高くても投稿率が上がる工夫を今後検討したい。
- 二高eラーニングの投稿については、アンケートの投稿などの場合8割程度であり、こちらの場合も100%の回収とならないことが課題である。授業中にすぐ投稿できる機会を作るなど、生徒自身のスマートフォンを活用することも考える時期に来ているのではないかと考える。
- 「自立度チェック」を複数回実施することで、生徒の知識・技術の定着に効果が認められた。今後も「形成的評価」の役割を担う「自立度チェック」を実施していきたい。
- 五感を意識した体験を積み重ねることで、「非言語認知」と「言語」を生徒が往還し思考することで、生徒の感性や人間性が磨かれていき、生徒の大きな成長がみられた。
- 研究授業で実施した生徒自身の振り返りの回読によるシェア活動は非常に有効であると感じる。教師からの言葉より、生徒の心に深く届く場合がある生徒同士のコメントを活用する場面を今後も活用していきたい。
- 教職員研修は、シラバスの作成や研修自体のデザインを工夫するなど、IDの考え方を導入した研修に職員で取り組むことができ、授業改善に向けた大きな一歩であったと感じる。また、「授業改善のための工夫の見せどころシート」の形式を職員で共有できたことは非常に意義深く感じている。
- 家庭部会の地区研究会でKP法を取り入れたところ、授業以外でも学年集会で活用できたとの声が聞かれた。活用しやすい方法を共有できたことは非常に有意義だった。
- ARCSモデルを体験した家庭科教師が複数いることで、今後学校を越えた授業改善のツールとして活用が期待できると考えている。

### 4 今後の取組

- 本校生徒にとってオーダーメイドの授業という視点を忘れず、生徒にあった取組を一層工夫していきたい。
- 学校全体の「深い学び」への活動に向け、教科を越えて「Eレベルの考查問題」の作問を蓄積し、共有していく。同じく「授業改善のための工夫見せどころシート」の作成を全職員で取り組み、蓄積・共有していく。